社会科学論集　第152・153合併号　2018.3

《特集寄稿》

経済分析メジャーへの招待

── あなたにとって経済学とは何ですか？ ──

高　端　正　幸

1　何のために学ぶのか

よい就職をするため？

経済学部の学生の皆さん。あなたはこの学部で，何のために，何を学ぶのですか？　面倒な質問ですよね。

まず，「何のために」です。「よい就職をするため」「希望する就職を実現するため」と答える人が多いかもしれません。ところが，「それじゃだめだ」と大学の教員は言いがちです。なぜでしょう？

大学の教員は，それぞれ自らが懸命に（皆さんの感覚でいえば「マニアックに」）研究している学問領域の基礎について，授業で教えます。授業内容には，その教員の「こだわり」が詰まっている。ゆえに，何らかの実利を得るために役立つから学ぶのではなく，授業内容それ自体に面白さ，学ぶ意義を感じてほしい。教員とは，そう思ってしまう生き物なのです。

でも，安心してください。就職のために学ぶというあなたの意志は，大いに尊重されるべきだと私（を含めた少なからぬ教員）は思っています。たとえば「公務員になりたい」「金融機関で働きたい」とあなたが真剣に思い，そのために学ぶというなら，それは立派な目的です。自分の将来をきちんと考えているわけですから。

もっとも，あなたは今，漠然としたイメージだけで，そういった職を志望しているかもしれません。いや，むしろその可能性が高い。その職に就くと，どんな環境で何をなしうるのか，本当に具体的に理解している人は少ないでしょう。ゆえに，自分にとってそれが適職であるかどうかも，大学で何を学べばその仕事に役立つのかも，よく分からない。ほとんどの皆さんが，多少のバイトをのぞき，就職したことがないのですから，それは自然なことです。私だって，自ら経験してきた職や，身近な人を通じて見聞きしてきた職についてしか，自信を持って「知っている」とは言えません。ですから，自分の将来について真剣に考えれば考えるほど，「○○をやりたい」という明確な目標はぐらついて，「よい仕事に就きたい」という，ふわっとした意識に立ち戻ることになりそうです。

それでは，「よい仕事」とは何でしょうか？　すぐ思いつくのは，「高い給与」と，「やりがい」といったところでしょうか。やりがいのある仕事をして，たくさん稼げたら言うことなし，と。

生きることと，社会を考えること

でも，人生って，そんなに単純なものでしょうか？　あなたにとって，よい人生，つまり「人として，よく生きる」とはどういうことですか？　その答えは十人十色でしょう。

ただし，次のことは間違いありません。人は，他者との関わり抜きに生きて行くことはできない，ということです。

あなたは，生活を営むために，様々な「モノ」や「コト」を必要とします。衣・食・住がその典型ですね。「ロビンソン・クルーソー」のように，厳しい環境の無人島にただ一人の状態で生きながらえるのは，至難の業だと言えるでしょう（そん

なことはない，と思う猛者は，ぜひ試してみてください)。このことは，次のように表現することができます。

> 人間が個人単独でなし得る能力はきわめて限定されており，まったく独力で充足することのできる欲求充足は限られている。そこで行為者は，他者との相互行為をつうじて，単独個人の場合よりもより大きい相互満足を実現することができる。
>
> 人間がまったく独力で充足することのできる欲求充足は何かと数え上げてみると，呼吸欲求，睡眠欲求，排便欲求など生理的な欲求の充足をあげ得るにとどまることが気づかされるだろう。人間行為の場合には，飢えや渇きの充足のような生理的レベルの欲求充足でさえ，高度の文化的欲求と織り合わされている。だから飢えや渇きの充足も，自分一人では高い満足を達成できず，農業社会段階では家族内での協力による自営業活動，産業社会段階では工場生産における分業や協働，市場での交換など，他者との相互行為を不可欠としてきた。そのような他者との密接な協力があったからこそ，人間は他の動物と異なって，狩猟採集社会の段階から近代産業社会の段階まで，高度の進化をとげることができたのである。
>
> (富永健一（1995)『社会学講義』中央公論新社，p.92)

人間は，一人ではほとんど何もできない。お金があっても，誰かが食料を生産して，流通業者がそれを小売店に卸し，小売店がそれを売ってくれないかぎり，あなたは空腹を満たすことはできません。電気を使うにも，石油を掘る業者がいて，タンカーでそれを運ぶ海運業者がいて，石油を燃やして電気を作る発電業者がいて，それをあなたの家に運ぶ送電・配電網が用意されていて，あなたの家にコンセントなど電気を使うための設備を整えた業者がいて…。でなければ，スマホの充電はおろか，夜の暗闇の中で部屋に灯りをつけることさえできません。(私は学生時代に何度か，電気料金の未払いで電気を止められた経験があります。夜，家に帰っても電気がつかない。生活がどれだけ電気に依存しているのかを思い知らされる瞬間です。ちなみに水道は，数か月程度未払いでもなかなか止められることはありません。水がないことは，健康ひいては生命の危険に直結するからです。なお，みなさんの中には，震災などの災害により，電気・水・ガスといったライフラインが寸断された経験をお持ちの方もいることでしょう。)

また，モノを買う，使うという面とは別に，あなたはより直接的な人と人との関わりよっても生かされています。あなたがこの世に産み落とされたとき，ただ一人で放置されていたら，あなたの人生は数日で終わったことでしょう。親，または他の誰かの庇護があって初めて，あなたは乳幼児期をまっとうすることができました。親，もしくは家族という存在は，一人ではほとんど何もできない人間を包み込む，最も基礎的な人間関係だと言えるでしょう。さらに，育つにつれて，あなたはより幅広い人々との関わりを持ってゆき，それにより生かされてゆきました。反対に，他者との「つながり」が欠如したとき，人間の生活は，物質的にも精神的にもきわめて厳しいものとなります。

一人ではほとんど何もできないあなたは，他者と様々な形で関わることによってのみ生きてゆける。あなた以外のすべての人々も同じです。つまり，あなたは，他者と関わることによって生かされるだけでなく，他者と関わることによって他者を生かす存在なのです。

それは，言われてみれば当たり前のことのようにも思えます。しかし，私たちは，そのことを忘れがちです。大人になるとは「自立」することだ，と繰り返し聞かされますし，自分の稼ぎで食えていれば「自立」しているとみなされがちです。しかし，自分一人の力で生きることなど不可能です。他者との関わりに恵まれたうえでの，限られた意味での「自立」しか，現実にはありえないのです。

このことを，違う切り口から見てみましょう。再び富永健一さんの言を借ります。

> 人間は両親がつくっている家族の中に生まれ落ち，都市または農村に居住し，学生に達すると学校に通い，学校を出ると企業や官庁に勤め，または自営業に従事し，（戦後日本以外の多くの国では）軍隊生活を経験し，やがて結婚して自分自身の家族をつくり，商店・スーパー・百貨店などで必要なものを買い，病気になると病院に入院し，国家と国民社会の一員として税金を納めたり年金の給付を受けたりし，海外旅行をし，死ぬとお寺や教会などの世話になる。
>
> 人の一生についてのこれだけの叙述の中に，定位家族（自分が生まれ落ちた家族）・生殖家族（自分が結婚してつくる家族）・地域社会（都市・村落）・組織（学校・企業・官庁・軍隊・病院・宗教教団）・自営業（家族企業）・国家と国民社会（国内で最大の組織と最大の地域社会）・国際社会（国家と国民社会を超える社会）など，多数の「社会」が登場している。このように，人は社会に属することなしに生きていくことは，事実上できない。
>
> （富永健一 前掲書，p.92）

他者と関わり，生かし，生かされる。このような人間関係が織りなすのが「社会」です。そうであれば，あなたが生きようとしているこの社会が，地域レベルであれ，国家レベルであれ，グローバルなレベルであれ，どのような経緯で成り立ち，いまどうなっていて，どう変わろうとしているのかについて無知であることは，海図も羅針盤も（グーグルマップも）持たずに大海原を航海するようなものです。それはあまりに無謀なことですね。

社会を問うのが社会科学です。そして，経済学は社会科学の一分野です。そう，経済学部で学ぼうとするあなたは，社会の中で，他者と「生かし，生かされる」関わりを持ちながら，「人として，よく生きる」ための，海図や羅針盤（やグーグルマップ）を獲得するチャンスを得たのです。

社会を深く知り，考え，問いを投げかける。それに真剣に取り組むと，結果として，あなたにとっての「よい仕事」のイメージも見えてくることでしょう。それは決して，ちまたにあふれる就活マニュアル本や業界研究本を手に取れば見つかるというものではないのです。

2　経済学とは？
経済分析メジャーとは？

答えることの難しさ

さて，ようやく本題に入ります。「何を学ぶのか」です。経済分析メジャーでは，経済学の基本をなす考え方と，その応用を学ぶことができます。以上，終わり。

本当は，このように片付けることしか，私にはできません。なぜなら，私自身は現在の経済学で主流をなす考え方や研究方法を採らず，やや独自のアプローチで研究をしています。そのため，「経済学とは何であるか」について胸を張って説明する資格が私にあるのか，大いに疑問です。しかも，経済学には多様な分野や数々のアプローチがあり，私はその中の一つを専門としているにすぎません。ゆえに，経済学の豊かな広がりについて十分に紹介する力もありません。

とはいえ，上の一言だけでは，読者の皆さんに対してあまりに不親切です。そこで，私なりに，経済学とはどういうものなのか，説明したいと思います。教育プログラムとしての経済分析メジャーの解説はほとんどしません。なぜなら，経済分析メジャーで学ぶことが出来るのは，「経済学の基本をなす考え方と，その応用」だとしか言いようがないからです。むしろ，経済学の基本をなす考え方や，経済学の深さ，広さをご紹介する中で，経済分析メジャーで必修あるいは選択必修となっている諸分野に触れていくこととしたいと思います。

なお，このような言い訳を述べたことには，2つの理由があります。

一つは，この言い訳を述べておかないと，経済学を専門とする他の先生方から「おまえが経済学を語るな！」というツッコミが殺到しそうだからです。

もう一つは，学生の皆さんから見れば経済学を専門とする立派な大学教員である（？）私のような人間でも，経済学やそれを学ぶ「経済分析メジャー」が何であるかを語るのは難しいのだということを，知ってほしいためです。10人の経済学者がいれば，10通りの経済学があると言っても過言ではありません。そのくらい，経済学は奥が深く，かつ豊かな広がりを持っています。そして，皆さんはその深みと広がりを味わうことのできる学部にやってきたのです。

経済学とは

経済学は，法学や政治学，社会学などと同様に，「社会科学」の一分野です。しかし，おおよそ20世紀の初めごろまで，社会科学はこのようにはっきりと分化してはいませんでした。それまでは，先に述べたような意味での「社会」を，様々な人が様々な方法で分析しており，それらが明確なくくりで区別されることがあまりなかったのです。

しかし，その後，経済を分析する視点や方法がそれ独自のものとして発達していき，経済学は他と区別された学問分野として確立していきます。そこには紆余曲折がありましたが，概して言えば，社会という複雑怪奇な対象を，ある特定の切り口からとらえ，なるべくクリアに説明するという方向で発展し，経済学という学問分野の幹が作られてきました。その特徴を私なりに要約すると，つぎの三点になります。

① 経済的交換に焦点を当てる

「他者と関わり，生かし，生かされる」という人間同士の関わり合いによって社会が成り立っているのは，すでに述べた通りです。経済学は，こうした人間同士の関わり合いのうち，主に，貨幣（お金）を用いた財（モノ）やサービスの交換という形をとった人間同士の関わり合いに着目します。誰かが何かを作り出し（生産），それが生み出した富が様々な人の手に渡り（分配），それが何かを買うために用いられる（支出）。この一連の経済的交換によって成り立つ経済活動が，家計・企業・政府という，大別して3つの性格の異なる主体によって営まれているというふうに，経済学では社会を見ます。なお，個々の主体の行動に注目して分析するための基礎理論がミクロ経済学で，一国単位の経済活動全体をとらえるための基礎理論がマクロ経済学や国民経済計算論です。

もちろん，社会は貨幣を用いた財やサービスの交換だけで成り立っているわけではありませんが，貨幣が人間の生活の隅々までいきわたり，富が貨幣という単位で表され，貧富の格差が生死を分けるのが現代の社会です。そこに焦点を絞って社会のメカニズムを明らかにすることは，非常に有益なことだと言えるでしょう。

② 経済的交換を「市場」というコンセプト（概念）でとらえる

日本を含めた世界のほとんどの地域において，今日では，何を買い，何を売り，何を作るかといった意思決定は，基本的に個人や企業の自由な意思決定に任されています。このような，自由な意思決定に基づく貨幣を用いた財やサービスの交換を，市場（しじょう）（market）というコンセプトで経済学はとらえます。2001年にノーベル経済学賞を受賞したJ. E. スティグリッツは，彼が著した入門的な経済学のテキストで，このように説明しています。

> 現代の市場（market）概念は，伝統的な村の市場のごとくに実際にモノとモノを交換した，物々交換市場の考え方を拡大したものである。
>
> （中略）今日では市場という概念は，取引が行われる場所も含んだものとされている。しかし，この取引は村の市場と似ている必要はない。デパートやショッピングセンターでは，顧客は価格をめぐっていい争ったりはしない。製造業者が，生産のために必要な資材

を購入するとき，他の財と交換するのではなく，必要な資材を貨幣と交換する（貨幣で購入する）。ほとんどの財（商品）は，生産者から消費者に直接売られることはなく，生産者から流通業者に，流通業者から小売商に売られ，そして小売業者から消費者に売られる。これらの取引のすべてが，市場経済（market economy）の概念に含まれる。
（J. E. スティグリッツ（薮下史郎訳）（1994）『スティグリッツ　入門経済学』東洋経済新報社，p.23）

③　個人や企業は自らの利益を（もっぱら）追求すると仮定する

個人や企業は，限られた予算の中で，何を買ったり（消費）作ったり（生産）するか，選択を下す必要があります。このとき，個人は自分が最も満足するように，そして企業は利潤（もうけ）を最大化するように，それぞれお金を使うでしょう。しかも，自分が損して他の誰かが得するような行動を好んでとることは，あまりないと考えてよいでしょう。そこで経済学はしばしば，個人や企業は「自らの」「利益を」追求するものだ，という仮定を基礎におきます。このように仮定された人間像を，「経済人」（homo economicus）と呼びます。

この仮定をおくことで，経済学は，市場（個人や企業の自由な意思決定に基づいて営まれる取引）や，その集合体としての市場経済全体の動きの中に，法則を見出すことに成功してきました。その法則を磨き上げれば，統計分析や数理モデルで説明できるようになってきます。計量経済学や経済数学といった分野がそれに伴い発達し，経済学の方法を支える重要な位置を占めています。

さて，「経済人」の仮定を置くことで可能となる，最も単純な説明の例を挙げましょう。自動車を買おうとする個人と，それを作る企業の間の取引（市場）を考えます。自動車メーカーはたくさんあり，それぞれのメーカーは自社の製品がより多く，より高い値段で売れることを望みます（自らの利益の追求）。それに対し，買う側の個人は，デザインや性能について好みは人それぞれありますが，同じデザイン・性能の車であれば，なるべく安いものを選ぶでしょう（自らの利益の追求）。そのように仮定すると，同じデザイン・性能の車を，なるべく低いコストで作り，安く売ることのできる企業が売り上げを伸ばします。そうでない企業は売り上げが伸びないため，コストを低める努力をするか，買う側の人たちに選んでもらえるような，新しいデザイン・性能の車を作ろうと努力することでしょう。それができない企業は，自動車の生産から手を引くことになります。

これが，需要と供給が価格をつうじて調整されるという，市場メカニズムの単純なイメージです。ここで大事なのは，買う側も売る側も自らの利益を追求するという仮定のもと，自由な市場取引は，買う側の満足を増やし，かつ「資源の効率的活用」をおし進めると考えられる点です。企業がより安くより買ってもらえる商品を作ろうと努力するので，買う側はより安くより満足できる商品を買うことができます。それは分かりやすいですね。

では「資源の効率的活用」とは何でしょうか。企業は，ある一定の品質の商品をなるべく低いコストで作るために，なるべく少ない働き手を使い，なるべく手間を省き，なるべく少ない原材料やエネルギーを用いて，その商品を作ることができるよう努力します。ここでの働き手（労働力）や時間，手間を省くための設備や機械（資本），そして原材料やエネルギーは，総称して資源と呼ばれます。これらはすべて，地球上に有限にしか存在しておらず，浪費すべきではないものです。そして，自由な市場取引において，企業がなるべく安くある商品を作ろうと努力することは，有限な資源の使用を必要最小限にとどめる（効率的に活用する）ことを意味します。経済学者がさまざまな財やサービスの取引を「市場に任せるべき」だと言うのは，それが買う側の満足の向上や資源の効率的活用を実現すると考えるからです。

同じようなメカニズムが，自動車のみならず，さまざまな商品の市場において働きます。また，普通は商品とは呼ばれない労働力の取引（賃金を

得ることと引き換えに労働力を提供すること）についても，こうした市場メカニズムが働いています。さらに，個人や企業が自らの利益を追求すると仮定すると，様々な金銭的な誘因（インセンティブ）を用いて，個人や企業の行動を誘導することも考えられます。ガソリンに税金をかけて価格を引き上げ，ガソリンの消費を抑えたり，障がい者を雇う企業に政府が補助金をあたえることで，障がい者が働く機会を増やすなどが，その一例です。

経済学の深みと広がり

以上に紹介したのは，社会を考える社会科学の中で，経済学が独立した一つの分野として発展していくさいに，そのベースとなった「社会のとらえ方」です。ただし，それらはあくまでベースに過ぎません。実際の経済学は深みと広がりを備えています。

経済学が一つの分野としてのステータスを保つためには，「これが経済学だ」という特定の視点や方法が定まっている必要があります。ところが，人間の関わり合いが織りなす社会は実に複雑なものであるため，経済学が特定の視点や方法にこだわっていては説明できないことが常に出てきます。もし，説明できないことがあまりに多かったり，重要な問題となっていることに対して経済学が応答できなかったりすれば，経済学の存在意義そのものが疑問視されかねません。そのため，経済学は，ベースとなる視点や方法を保ちつつも，社会の現実と常に向き合い，現実を説明する力を磨き上げる努力を重ねてきました。それが，経済学に深みと広がりを与えているのです。

この豊かな深みと広がりを的確に描写する力が私にあるとは思えませんが，それでもあえて試みるなら，つぎのようになるでしょう。

①　市場メカニズムが置く仮定を問い直す試み

先に述べたように，自由な市場取引において，個人や企業は自らの利益を追求するものとみなして，経済学の最も基礎的な理論は組み立てられています。そして，それは社会全体の利益も実現させると考えられていました（個人の満足を向上させ，資源の効率的活用を実現する）。

しかし，このような市場メカニズムのとらえ方そのものを修正しようとする流れも，経済学の中にはあり，近年ますます重要性を増しています。

例えば，ゲーム理論です。かつての経済学では，個人はそれぞれの考え方にしたがって，独立に行動を選択すると仮定されていました。つまり，ＡさんとＢさんが取引をするさいには，それぞれの意思にもっぱら基づき，相手がどう考えどう行動するかと関係なく，自らの利益を最大化する行動を選択し，それが社会全体の利益にもかなう，と考えたわけです。

ところが，現実の取引では，そうとは限りません。例えば，ＡさんとＢさんが，互いに協力するか，しないかを選択できるとします。このとき，2人とも協力することを選んだ方が，2人とも協力しないことを選んだ場合よりもよい結果になることが分かっていても，「自分が協力することを選んだのに相手が協力しないことを選んだら，自分が大きな損をし，相手が大きな利益を得る」と分かっていたら，2人とも協力しないことを選びます（「囚人のジレンマ」。ここでは説明を尽くすことはできませんので，関心のある方は調べてみてください）。

これは，20世紀半ばに始まるゲーム理論の，最も古典的な発見なのですが，なぜこれが重要なのでしょうか。ＡさんとＢさんが，それぞれ自らの利益を追求することを考えて行動したにもかかわらず，その選択の結果（2人とも協力しない）は，ＡさんにとってもＢさんにとっても最良の結果（2人とも協力する）にならず，ゆえにＡさんの利益とＢさんの利益の合計も最良のものにならないからです。言葉足らずで申し訳ありませんが，要するに，「個人が自己の利益を最大化することを考えて行動すれば，社会全体でも最も望ましい結果となる」という，かつての素朴な市場メカニズムに対する理解が覆されるのです。今日，ゲーム理論は発展を遂げ，個人や企業の行動を分析するために広く活用されています。

もう一つの例が，最近ノーベル賞受賞者を連発

してにわかに注目が集まっている，行動経済学です。従来の経済学では，人間は自らの利益を追求するという目的にそくして，合理的に，筋の通った行動を選択すると仮定されてきました（上記の「囚人のジレンマ」も然りです）。

しかし，実際には，人は不確かな情報を確信したり，考える前に直感や「思い込み」で判断したりもする，非合理的な面を持っています。それでも，基本的に人間は合理的に考え行動するのだ，と考えることは可能です。ところが，近年進んだ研究成果は，私たちが思っているよりずっと，人間の思考は非合理的なものだということを明らかにしてきました。そうであれば，人間は基本的に合理的に行動を選択するという，経済学が置く仮定自体を見直す必要が生じます。これまで，行動経済学は経済学の中でも亜流とみなされてきましたが，それが本格的に経済学の核心に取り込まれていく可能性も出てきています。

さらにもう一つ，マルクス経済学に触れておきます。マルクス経済学は，経済の本質を，市場メカニズムのもとで「自由な市場取引において，個人や企業が自らの利益を追求する」という，今の経済学が当然視している視点ではとらえません。では何を本質だとみるのか？という問いにまともに答えることは，私の手に余ります。しかし，経済のあり方をとらえるさいに，市場というコンセプトより，むしろ資本主義という特徴に注目すること，そして資本主義や市場メカニズムの不安定さや，それらが富の集中と不平等を生み，人間の自由を奪う側面を重視するということは特徴として指摘できるでしょう。市場メカニズムを強く信頼するタイプの経済学が強まる最近の傾向のもとで，それに抗うマルクス経済学の存在価値は，経済学の中での考え方の多様性を象徴する貴重なものだと言えます。

②　経済的利益や効率性以外の価値の取り込み

市場メカニズムは，基本的に消費者の利益を高め，資源の効率的な活用を実現すると，基本的には考えられます。つまり，経済的利益や効率性を追求することに，市場メカニズムは優れているのです。しかし，世の中には他にも大事な価値があり，それらが市場メカニズムにより損なわれることがしばしばあります。それらの価値も経済学が重視するべきだとすれば，市場メカニズムに基づく経済的交換として経済をとらえることにとどまらず，より多様な視点からの分析を，経済学は目指す必要があります。

例えば，自由な市場経済は，貧富の格差を当然に生じさせます。日本でも格差や貧困が問題となっていることは，皆さんご存知だと思います。この貧富の格差が，もっぱらそれぞれの人が学んだり働いたりした努力の結果として生じているならば，正当なものだと考えることも可能でしょう。

しかし，現実には，貧富の格差の一定の部分は正当なものではありません。たまたま生まれた家庭が裕福であれば，生まれた時点で有利となります。いったんビジネスで成功すれば，人脈や資金に恵まれ，市場メカニズムのもとでさらに成功することがしばしば容易になります。そうして得た莫大な富は，正当なものでしょうか。また，就職してみないと企業の内情はよく分かりません。たまたま就職した職場が残業三昧でハラスメントも横行するブラック企業だったため，体も心もボロボロにされたうえに失業し，回復が難しくて再就職ができず，貧困状態に陥ったとしましょう。この人が貧困であることも，自己責任で，正当なことだと言えるでしょうか。

もし正当でないと考えるなら，貧富の格差を是正したり，貧困状態の人を支援したりしなければなりません。政府が税金や社会保障政策で富を再分配したり，人の力ではどうにもならない不利条件を是正する策を講じたり，働くことが難しくても最低限の人間的な生活を送れるような支援を整えたりすることが求められます。これは，経済学が，市場メカニズムにそくして社会を説明することにとどまらず，その使命を広げる契機となります。財政学や労働経済論，社会保障論などが，そこに関わっています。

いま，一国内の個人間の貧富の格差を取り上げましたが，世界を見渡せば，経済発展に苦し

み，多くの人が貧困にあえぐ国が数多くあります。2015 年時点で，1 日 1.9 ドル（約 230 円）以下で暮らす極貧層は世界人口の 12％を占め，その 8 割が南アジアとサハラ以南アフリカに集中しています。近年，極貧層は縮小していますが，その多くは人口が圧倒的に多い中国とインドの経済成長の結果であり，世界全体で貧困問題が改善に向かっているとは言えません。こうした問題に対し，開発途上国の経済発展を考える開発経済学や，開発途上国が抱えるより具体的な問題にアプローチする地域研究が取り組んでいます。

また，地球温暖化や生物多様性の喪失といった環境問題の噴出により，持続可能性（sustainability）という価値も重要性を増しています。従来の経済学は，個人さらには社会全体の利益を最大化するという基準で物事の「望ましさ」を考えていましたが，それでは際限なき経済成長と環境破壊を正当化することになりかねません。環境経済学が，地球環境や，より身近な環境問題を考慮に入れて，持続可能な社会を目指すための研究を進めています。

③　制度や政策の探究

個人や企業の経済活動が市場メカニズムをベースにして繰り広げられる。これが経済学という窓から眺めた時の，今日の社会の姿であることは間違いありません。しかし，そこでの個人や企業の経済活動が，彼らの「自由な」行動によっているとは言うものの，現実には，個人や企業の行動は，様々な制度（あるいはルール）に従っています。また，政府の政策も経済活動に深く関わっています。

むしろ，制度や政策がきちんと機能していればこそ，市場経済は成り立ちうると言った方が正確です。無数の個人や企業がそれぞれの意思にしたがって財やサービスを作り，売り，買い，人をだましてまで儲けようとする魑魅魍魎（ちみもうりょう）さえ跋扈（ばっこ）するこの社会が，曲がりなりにも安定を保つためには，何をどこまで個人や企業の自由に任せるのか，いかなるルールでそれを律し，いかなる政策で個人や企業の行動に介入するのかという難題に，適切な回答を示す必要があります。

こうした制度や政策は，本学部では主に「法と公共政策メジャー」が扱う事柄ですが，「経済分析メジャー」すなわち経済学も制度や政策の観点を多分に含んでいます。

例えば，金融政策という政策領域があります。経済学の中でも，特に経済政策論や金融論が専門とする領域です。ちなみに，今の日本では，「アベノミクス」の一環として，前例のない特殊な金融政策が行われています。「政策」というからには，政府が決めて政府が行っていると思うでしょう。実際にそれは「アベノミクス」の一環なのですし。ところが，金融政策は，原則としては政府ではなく，日本銀行といういわば「銀行の銀行」が決定し，実施するものなのです。

日本銀行のように，一国の通貨を発行する権限を持ち，金融システム全体を調整する役割を果たす銀行を，中央銀行と呼びます。そして中央銀行は，政府の命令や要求に服さず，政府とは独立して金融政策を担うべきだと，多くの国で考えられています。その理由は（重要なのですが）ここでは省きますが，日本の場合にも，日本銀行法という法律で，日本銀行の政府からの独立性が明確に定められています。ところが実際には，今の政権の意向を汲んだ金融政策が，日本銀行によって行われているのです。

そのこと自体は，良いとも悪いとも一概には言えません。いずれにせよ，政府と中央銀行との関係をどのようなルールで律するか，そしてそのルールが慣習上，どの程度実際に機能しているかといった点は，国によって多様です。そして，その違いが，実は金融政策のあり方に大きな影響を与えるのです。

以上は一例に過ぎません。経済政策論や金融論だけでなく，先に挙げた労働経済論，財政学，社会保障論なども制度や政策を正面から問いますし，ミクロ経済学やマクロ経済学といった基礎理論を扱う領域も，制度や政策に関っています。経済学がその基礎におく市場メカニズムという切り口と，制度・政策の現実的な重要性とは，学問のうえでも，現実社会においても，切り離すことの

できない一体不可分のものなのです。

④　歴史を読み解くことの意義

経済分析メジャーに，日本経済史，西洋経済史，経済学史といった専門領域の科目が用意されているように，歴史的な視点も経済学に深みを与える重要な要素です。なお，日本経済論も，戦後の日本経済の展開を論じます。

なぜ，経済の歴史や経済学の歴史を問うことが重要なのでしょうか。せんじ詰めれば，答えは簡単です。仮に，私があなたという人物を知りたいと思ったとしましょう。そのためには，今のあなたを知るだけでは不十分です。今のあなたの考え方や行動の傾向，好きなことや嫌いなことを形作ったのは，あなたが生まれてから今日までをいかに生き，何を経験し，何を考えてきたか，つまりあなたの過去ですね。よって，今のあなたを深く理解するためには，あなたの過去を理解する必要があります。

経済や経済学の歴史を掘り下げる意味も，同じことです。今の経済を理解したり，今後の経済のあり方を考えたりするためには，過去を理解する必要があるのです。過去の積み重ねの延長線上に，今が成り立っており，今の先に未来があります。

このように，明らかに重要であるにもかかわらず，経済や経済学の歴史を学ぶ機会は限られています。というのも，新聞やテレビ，インターネットなどメディアが伝える経済に関するニュースは，そのほとんどが今の経済に起こっていることを伝えます。しかし，どんな過去の経緯があってそれが起こったのか，あるいは，過去にも似たようなことがあったのか，といったことを，掘り下げて伝えてくれる情報にはなかなか出会えません。そもそも，誰もが気にするのは今と将来であり，過去は変えられませんから，「今の経済はどうなのか」「今後どうなりそうなのか」ばかりが気になりがちです。今と将来を考えるためにこそ，過去を問うことが大事であるにもかかわらずです。その大事さに気づいた皆さんが，経済や経済学の歴史を学ぶ貴重なチャンスが，「経済分析メジャー」には用意されています。

3　再訪：何のために経済学を学ぶのか？

私自身は，財政学という経済学の一分野を研究し，授業やゼミで教えています。そして，財政学者と呼ばれる人々のなかでも，実は比較的少数派の，独自のアプローチを追求しています。

私は外国の高校に通っていたため，高校時代から経済学の授業がありました。もちろん，その頃は研究者になるとは全く思っていませんでしたが，当時を思い返すと，人と人とが関わりあって成り立つ社会を，貨幣を用いた財やサービスの交換という側面に着目して説明する経済学というものに，面白味を感じたことは事実です。

大学では，法学部なら国際関係論（政治学の一分野）を，経済学部なら開発経済学（発展途上国の経済問題）を勉強したいと思っており，両方とも合格したのですが，家庭の事情で経済学部に進むことになりました。

その頃から，少しずつ，市場メカニズムを中心に置いて分析する経済理論に魅力を感じなくなりました。というのも，私の関心は，なぜ世界には国ごとに異常なほどの貧富の格差があるのかという点にありました。現実を知れば知るほど，その原因を説明し，問題に解決策を与えるためには，オーソドックスな経済理論ではなく，他の切り口から社会をとらえた方がよいと思えてきたのです。

大学院への進学を決めたさいに，財政学という切り口を自分の専門に選びました。そのうちに，研究を深めることに面白さとやりがいを感じるようになり，運や周りの人にも恵まれた結果，研究を一生の仕事とするに至りました。その間に，研究のテーマも，発展途上国から日本を中心とする国際比較研究へと変化しました。日本に生きる者として，自国で眼前に広がる深刻な諸問題から，目をそらせなくなったためです。

たまに新聞や雑誌に論考やコメントを書いていますし，論文や本ももちろん出していますので，私がいまどんなことを考えているのか，興味を

持った方は図書館やインターネットで触れてみてください。

何のために経済学を学ぶのか。この文章の初めのほうですでに私なりにお伝えしましたが，最近コミック本化されて話題となっている古典的名著の一節を借りて，私の思いをあらためてお伝えしたいと思います。

> 人間が本来，人間同士調和して生きてゆくべきものでないならば，どうして人間は自分たちの不調和を苦しいものと感じることが出来よう。お互いに愛しあい，お互いに好意をつくしあって生きてゆくべきものなのに，憎みあったり，敵対しあったりしなければいられないから，人間はそのことを不幸と感じ，そのために苦しむのだ。
>
> また，人間である以上，誰だって自分の才能をのばし，その才能に応じて働いてゆけるのが本当なのに，そうでない場合があるから，人間はそれを苦しいと感じ，やり切れなく思うのだ。
>
> 人間が，こういう不幸を感じたり，こういう苦痛を覚えたりするということは，人間がもともと，憎みあったり敵対しあったりすべきものではないからだ。また，元来，もって生まれた才能を自由にのばしてゆけなくてはウソだからだ。
>
> (吉野源三郎（1981，初版 1937）『君たちはどう生きるか』岩波書店，p.252-253)